里見八犬傳

第二輯

巻四

341
9

二度の参詣

秋野勝善院

南總里見八犬傳第二輯巻之四

東都　曲亭主人編次

第十七回

妬婦遅く墓六螟蛉を産み
孝心を固して信乃曝布を襲ぎ

却説犬塚番作八年来の志願稍遂て。男子既に生れ。母も子もいと
さくよろこぶ。産室撤るころ。めぞろのまぬさく。児の名を何とかぬと。女房
ふ束ね潭に。ふ束八且く沈吟す。よみ子三月のころ。めの八男児なれば女の子と。
女の子なれば男名つけく。中るひ三月。恙なくとく。如此さる人も稀なれば。
我夫婦ふ幸なく。男児三人挙ーとみる。殤子まくなくなりぬ。
この度も又男児なれば。一ーに名よろく。なまそ。想像のくせ。
まれ子が十五なるよ。比まぐ。女子ふ。恙あらーとも。

ひ〻く名けゐくといふべ番作うち笑ひて死生命あるは名の咎なるべし人や齊
なれば俗の僻事いと信ずるに筋なるべし。あん身がひとりまゐもなりぬ俗は
後ふもこころえよあらじ。古語は長くて死志のとゐふ和名鈔は長竿を志のろ
と訓せり。則是なり。今も穂の長き芒を志のもとゐたるとしるべし繁昌をき
とさとゐふ非なるべし。こゞ子の命長くと祝のさろめく。その名は信乃と
ぶ。唱ひて紡昔は美濃路なく不思議なるべし信濃路なく
夫婦とうるはぬ。志のと志ゐのとその声近し。越鳥は南枝に巣ひ胡馬は
北風に嘶といふ。孰かその原を応まん。こゞ子の〻幾迹なく受領をうる
さへあらん信濃の守護ゐもうるとうと。と赤祝ぞのところに稱へり。この名は甚
麼と実ともなく。問べゐ東は伊あくぶそへいとめでたく名ゐたべり。富
人は五十日百日と産室中ゐひの賀ゐ酒ゐ呑ぶ日も多うり。せるて

この子が名をもて亀の神ゐ神酒献ゐ習子と綿の弟子ゐ。ゐの食
せるるとやとゐふ番作うち点ぜるるもかくしそゐふるゐとくと
いそぐせふゐ東は鄰れ媼あゐ備ひくく。赤小豆飯に雑魚の羹美は膾
とゐそぐ目つゐ拙く料理くく里の総角ゐ召聚會盛るべしゐ
飯さへゐ。あるかゐの二荒膳著とるへぐる髫髮ゐ顔は隠く親碗ゐ
子の久後を壽ぐの饗応はみる嗅るく。膝ことぶき粒飯を拾ひも
あへぬ身を起く。紡ぐゐ述べく還るゐあり。人より先に草履を穿人穿
せと置くく。眼てかくるゐヨヌるとけるに長よるとゐ東は信乃が衣裳を
女服にせるるもるく。三四才の兒に及びくく髫髮ゐくなどゐもるるとゐ
擲挿せ。掻頭させくく。信乃よくと唱ひくゐ。ちるざるゐはこの児と女
の子るくんとるひるる。さるゐ蟇六亀篠はこの為体をるゐくく毎ゐ嘗

拍手冷笑ひ凡人の親たるもの男児を挙る面目とせざるべからず。今時の武士の浪人が女の子を願ふいふかぞや。結城合戦より逃後は脊疵受るよりさく
と。懲りたりく軍といふものをもとこれ世間。とりてかくまぐ戯れ盡に欲るひ
しふまれ白徒えと賢ぶちく幾ばくども合鎚雛をもとめんるく。郷の里人ホハ信
の乃を愛しく物ぬそせ迭代よ抱とりく。その母のるぬ助けしぶ墓六夫婦ハ
いくぐ考く姫ぬと限るし又美しくそうとども淫婦ホ石女ヨヌしといふ。鄙語よ得る
漏ぎしく。亀篠四十ホあるるホで。子ども えとるるりしふ夫婦頻ホ
商量そロハ管養女を乞るホ。そぶ媒妁さるるのありて煉馬の家臣（紙鳶の煉馬氏ハ豊嶋左馬ぶ一族なり。煉馬平左衛門と号ハ是ぬ。）某甲といふものの乃女児今茲僅よ二才ホなるまえ。
ニハその親の忌とらいふ。四十二の二ッ子るまえ生涯不通の約束まて永
楽銭七貫文を齎し。家系宜ぬるもあらん養女よ遣をびといふ。

件の女の子ハ生れ出ぬるく目鼻ぶちぬ愛らく。痘瘡もこの春の比のとかろ
ホふるるてふれハ寔よ疱ぬ玉よるんとだるるるで去歳の春正月の
ちぶめよ生れしニハ年つよとろいふ二才児えかるるハ乳母るしといふとも学ぶ
かるぬとハあれど養ひ多と勧るハ墓六亀篠ハ笑ぬ向く共ホ小膝の進
むぬ笑えど件の果く月ぬ住し。蜜ぶ塩焼かるぬ世よ子の齋とく永楽銭
七貫文ハ些少よあるを。目今和殿ぶの絆潟るぬのるハ素より望む
所ぶるるとくるるるるるぬと。夫婦齊一應しぶ件の男ハとろ彩果て遠しく
生くるるぬかくく五六日を経るぬ。その縛竟よ整しぶ媒妁の男しくそ
子の親と墓六と燈文をとるるる彼七貫文ぬる共ホ女の子を大塚へ贈りホ
けるぶ亀篠ぶく抱ぬとるく。まづその頼ぬうち熟視又指より跟まで泣
をも管ぶど引伸しうちくくとるく。驚き笑ひ三十二相揃ひし

と何れをさしくいかゆや志ら孫ど寔ふこの子ハ掘出物なりこれ凡人と
さしあるとゝびゝ蟇六いよく懇ゝくよれ子ぞ勿注ねそせんと扶へ右も兵さゝ
ハゝとくとり出し果子の花のゝぢ。実ふゝね親と志ふぬ子も有繋口ふゝ
孝行まて朝四暮三の猿鐵術さろどく注止こけと現頑なるのゝそのゝ
偏執の心りく。こゞ物とぞふ名兵法くまゝ傷いて愛ふ溺まく他の嘲を
志るよゝまゝふ況く蟇六亀篠ハ妬ゝと志ふ番他夫婦ゞ鳧を印ゞん
とのゝく志ひゝこゞ件の養女を濱路と名つけく分ふ過ろ綺羅を飾らせ。
是れの遺山彼れの物詣とく。下女ゝ抱せ小厮ゝ先を追せろ。四十老女の
亀篠さ又雑倉様の衣兵龍裳ゝて月の中まハいく遍とろく。出ある兵ふ日と
費ゝ残を費ゝく。嘲を志らど加以こゞ女児の髪置紐解とふふ手まふ身丈
十倍の美服兵被せて健なるをとの肩ふのゞゝ城塁詣を假托ふ彼此人ゝ

弄費さふよゝ阿狸の言葉巧ふ巣を誉ふのあまゞ家裏の飴惜氣とろく。
ふゝその人ゝ饋ゝとゝハ寔ゝ甘き親とふめり。かくく濱路ゞ生育隨ふ東
西を志ろ比よゝ。糸竹の技ふ師を擇ゝく。朝よゝ夕まで。ちち囃ゝ弄躍ゝく。
絶く四都を憚らどよろゞ化ゝ養ひこゝ生得ろ容止の人なゝろゝふ
立まさゝ兵鳥の子ふ鷹まゝとく。女児を誉る陰言を仇ゝ二親へろく笑て。
こゝ兵嘲るよ兵曉らど位高く富さゝく。世ふ威徳あ増ろゝ
招ゝ兵ゝ綾ゝけ。業下某生再現犬塚番作ゞ一子信乃ハ。ちゝ九才ふ
ハ骨逞ゝく膂力まゝ現尋常ろ人の子ゞ年十二ふろのゝ角の丈
一岌高かろふ屋女服被せゝ兵とく。崔小弓ふ紙鳶印地打竹馬ろゞとろゞ
の遊びもあゝくゝれまでものづゝ武蔵兵好めハ番他ゝとく鍾愛ゝ朝
ハ里の総角ともふ習させ夕ハ儒書軍記の句読を授又ゝとゝハ

試みに剱術柔法を教ふ。素よりこれを好む道なれば。その技の進むこと。親尚ほ及ばず。志ざす古を掉さ。さるにこのもしく思ひ。父はかくても母は束ねこぶ子のいとも怜悧なるを。ひとりなる孝心の挙動ふ顕はしく。親さへ人の稱誉るまでに文の道武の藝も手あへ倍くその器を稱へ。短命なるあはれやと。彼此思ひ此と思ふよりとふかく心安く孫八夫を練め。子を禁め習ひ学ばしめ。孫ど。縛大くふせよといふ。されば信乃が心ざすよの童子とさへ人まく。母乃目影を匿びしも。行乃とりみとりざる日をなく。馬よさへ騎なれんと。名ふ心のつねとなる田舎は小荷駄のこまく。借馬なのどいふめいあまど。企ふ信乃が生涯は北母親を束ぬ。龍の川なる。岩屋猪の入るさまはるく。まつる狗の子へ信乃ともに大くなるまく。今茲は既に十オなり。この狗脊は墨より黒く腹と四足は雪よりも白くく。馬は所云贈なれば。その名を忠て四白とも又は四郎

とも呼ふ。狗ふ年来信乃によく狎れて。撫れども打擲しても怒ることなく。ひたすらその意に隨ふなり。信乃は件の与四郎に索勒をかけくちに乗せ。狗は主乃とろ紙ゆく。足撥を早めく幾返りなれ。維教孫どもその騎座勒さへの弾法を稱ふ。笑ふもあれ。又ヒの童子ども侍平人はあれどとく。賞嘆せるもなかりけり。現玉人はあらざれば。碪砧と真玉とを忘るるとなり。信乃が女の子乃打扮みく。武勇る技のこまとみび里の総角は指ー哨ふく。陰嚢なりとぞ難ふ。かくても信乃は物とも思ふ。彼奴は土民の子なり。遊び敵なれば。ふねは論はを盖とこれ。辟くはしびも。ちはあれどもこぶ力とり。よのこべらとは異みく。女の子めなる衣をのこ被せるはいかなるやとふ。ねんくはのふ事は紛れく親は問ふ。襁褓のうちよりも肌膚はけ。

○山清文藏

被馴〜女服るまゝ愧る乳色ハうるはしけれ。さるに猶ホ今茲秋のころよりまゝ
束ハ心地例なるぞ。病の床ゑ臥〜より。鍼灸藥餌の驗ゐく冬のちゞ元ホ至
て。日ホくゝるほどゝるまゝ番他ハいとゞく眉うち顰くゝもゐく夜とて
安くゝ目睡ぞ信乃ハ又あさゝれく。醫師許往還〜ゐ湯液をきゝ胃を捺り
四表ハ表の物ゝ里ゝ母の後然を慰るホゝろぞ涙目ゑ盈て。ゆうゝゐ元
又庚母ハ胃ふゝゞて泣白ゝ隱元ゝ鳩尾を拊ゝ痞ゑ緒らゝと親
子迭ゑゝろゝの。ゝ孩ゞゝろゝ元孝行慈愛ゝろゝぞ想像ゝるゝかゝてゝの
結旦信乃ハ藥剤ゝろゝホゝゝく。いそ〜く出ゝく出元〜後番他ハ妻の枕方ゑて
小鍋ホ粥の塩加減〜ゝく。半角元〜扇の風ホ火ゝ起させゝく居ゝ〜ゞ。
身東ハゝろゝホ頭ゝ擡常ゑハあふぬゝゞ良人の火打水汲ゑゞけゐく電
働元ゝのハと心苦〜元限アホ給ゞ。加ゝ十ゑ足ゞぬ信乃ゞ項日大人〜く。

親ホゝゝく夜の目ゑ寝せゞ。かゝくゝゞでホ憑〜元良人とゝゞ子の收抱を愛
ても卒ホゐく道の別とゝゞ給ゞゝ抑ゝゝゝゞが此度の病著ゐゝあゝゝぬ
べ元ゝホゐゐ素ゝゐゝ信乃ハ祈子ゑゝく云云の奇端ゑゝ。かゝく拳〜元ゝゝ
子ゐゝゝゞ。年ホ倍ゝる智ハ長ゝく。親ゝゞゝ元ゑのホ給ゝハ陽子でゐく
せ〜兄ホ懲ゝゐ〜短命ゝゑゝゑゝゞゝゝゝゝゝゝゝゞ元ゞ彼ゞ定業
脱ゝゝゝゝて生育ぬゝゐゐゞ母ゞ命元撫させゐゝと瀧の川ゐる岩屋殿
神ホ佛ゑ年末ゝゐ願望竟ゑ空ゝゞで信乃ハ襁褓の中ゝゝして。蛇乳ゐ
あゝゞ風ゝゞ輕元疱瘡の神送ゐ。侭子の疫を病果ても男児ゑゐ
怪我ゐゐゝとゝホ七才の巓踰ゝゝ〜ゝ今茲ゝゝゝゞ外ゐゝゝゝゞ子の久後
会願成就。かゝゐ命ハ惜ゝゞく。悲〜元ハ只元別ゝゝゝゝゝゝ鉄る垂乳女の母ハ
ゐくとも答ゞぶゝゐゐ〜ゐゝゞ元ゐく。何時ゝゞ生育ゐゐ久くゝゝゝゝぬ

婆婆と宗人ハ可惜財を費しく湯菜ゑん八毫盃ゑ付ゑうち捨てゐた
ゐひ絃とらひあくゑ涙さしこて呼吸細る光期の言の葉脱ゐハ袖乃露
霜ハよるゑと果る秋の蝶尼羽挽るゑゐひる番作ちゑく嘆息し異ゐる
ゑ父ゑくゐのゐる子の命ゐかゐゑんとく。かゐ爲くゐのゐるゑぶ世ゐ子と喪ゐ
親ハあゑゑ。ゑ爲煮ひゑゐ病もゑゑよしゐく抱ゑゐゐんよるゑ茶ゑ服粥をも
喫ゑゐく。ゑ乳長く保養ゐ見人と理ゑ盡しく諭しけゑ冬の日ゐれハ短くく。
ゑやゑ己のゐゐゐるゐゐゑゑ生平ゐゐ抱ゐゑく信乃ハかゑゑゑゑど薬路草を食ゐゐゐ
あゑゑゑゐゐゐゐんと子をゐゐゐ親の乞ハゐちゐゑゑ番作ハ外面へ出てゐん
とく障子を開けハゐひゑゐく縁類ゑ茶剤のかゐゐ管ハゐゑゑハ洗しと
紐とゐゐく。盞ゐんとゑハ茶剤をあゑ。さゐてゑと尼類ゑ笑ゐゐ。件の管を
携ゑく遽しく裡面ゑ入ゐ。ゐ束ゑ。茶剤ハ彼処ゑゐゑ何の程ゐゐ信乃ハ還

ゐゐく。乳鬱を散ゐゐ生ゐゑん寞ゑ童ゐゐぞゐ。ゐん角が病著の初ゑ。
あゑゐゐゐゐ苟ゐゑ外ゑ立ゑゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐけく欲還ゐゐ。ゐゐ告を又生ゐゐ。といゐゐ母束を稍おちゐく。
ゐゐゐくのゐゐゐゐ必ゐ叱ゑゐひゑ還ゐゐ程ハゐゐゐゐといひゐもその顔
ゑゑ移ゐ尼ゑゐゐゐゐかゐゐゐゐ。かくゐゐゐ。末のゐゐゐ過ゑけん昼斜ゐゐゐゐ
ゐく。俟ゐもく信乃ハ還ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐも食ゐく何処ゐゐ。ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
頭をゐく遍ゐ挙く瞻望る外面ゐ板金剛の音をゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
浪速の浦ゐ刈とゐ人のゐゐゐ恨ゐゐ妻ゐ唧てゐ番作も立て足居ゐく足
ゐゐ不樂ゐゐゐゐゐゐ嘆息しゐゐ足舊のゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
かゐゐゐゐ索てゐて還ゐゐ日景短ゐ小六月ゐ夕陽ゐ瞻ゐ杖ゐ携て何地ゐゐ

あるべき。然とて暮るまいよく便なり。萱葺まで。一刀を挿て竹杖衝こなし。
たゞ外面へ出んとて浩処に番作が背門の前面なる荘客に糠助と呼てとゞめ。
右手に一條の釣竿と一箇の魚籠を携て。左手に信乃を扶掖き遽く結
まつ。今外面へ出んとて。番作と面をあらゝて呵こうち笑ひ大塚氏欽其処に
おもせり。秋の稼もなくて。骨休めとて。一日の暇なりけるに
未明にうち出て。神谷川に雑魚釣暮し。瀧の川辺かつまるまで。なる息
子が不動の瀧に水垢離執て。身に冷徹り息を絶べき形勢をなつけ。時に
騰波して。周章て引出して。坊へ帰て。菓火に煖め薬服せ法
師ども共伯に勧て半晌許。ぢめくこと。復て。湯飯晴て腹と肥
させ。縁故に尋ぬ母の大病平愈の祈禱に水垢離をとゝ。と云十ゆも
足らぬ童に。傳稀なる大孝行。法師ども感心せざるべく。求ざるとも當病平

愈の神符洗米をもらはるゝ。件の瀧に寺へ遠くて。こゝ外に人なきを。宜に
危きなるべし。かくあぐ賢なる子に。親なる佛神。なるべきに安れ
本復疑ひなし。いざ子こゝを受とて。暮かゝるを退て病人に
よくさとらるゝよ要あらば。門口に。竹螺鳴して呼び。和子に知せあるべし
あるよとの魚を食せんとあがいらるゝの。殘る人の挽拝の果を
裡面へ入てかくりけり。さてゝとゝ。番作。こゝ子の肩を杖に扶
陪框を足引の山道踰こゝちして。こゝ奥へ。こゝを束を綜の
越て。病苦に。こゝ子を。こゝ迫信乃に。こゝの
さらるに孝行つくもを。こゝ子を。こゝ子の孝を。こゝ神に
こゝに。こゝ不孝ども。親に。こゝ神に。こゝ
守るべし。危所を去るべと。諭せば信乃は酸鼻宜に所なく

今朝醫師許赴きて。薬劑あつらへて還りし折。家なるに家母の物がたり。信乃が命の長かれと勿体なくも己が母は命を贄に神明へ祈らせたまひし験にや長き病著に臥たまふと宣はせ給ひ。竊に聞て哀しさ限りなき涙に濡るゝ袖を泣声をしのびて噬締て。縁頬にてありしが。親の願望験あらば。こはわれとても験ありなん。いかでこの身を贄にして母の命にかはらんと思ひ決めつ。かくてありし薬劑を其処に密と措て。手束母刀自の信ある瀧の川に走り到りて岩屋の神に祈念す。ふり返し見る瀧の糸。心強くも身を擲下さんと死なんとせしに。そのをりしも待てありけん。後より糠助男に妨せられて活て還る。願望を神へ受させなかりしかば。いと朽をしく待てといひかけて目をおし拭へば。東へよりて泣流しぬ。よに子をうたぬ親はあらじ。それとも死なんとせしもその身なかり。幸あるもなきぞとよ八九才の

稚きすら不賢しや親にかはらんと祈る誠を神明の受ずべからず。瀧壷の水屑となりて還りけめ。かくまでに命運つよき己が子のうへに久しかれと思へは嫉しきに涙のそゞろおちて禁めがたし。母がおん身にかはらんとて祈りし人の惑ひなり。験あるべきものならねば。おもふにまかせよしやその願ひのゆるなりとも。ひそと涙の隙に諭しけり。番作は何ともいはず。つく〴〵と倚りて形容改め。信乃よ。われはこの子なり。その至孝よわかざるとせず。慈母の惑ひを解よかしんや。周公金縢の書のごとくなる神に祝して成王の病にかはらんと願ひけり。儻は當時の寓言歟。亦是至誠至感の徳のいたる物の命数も人乃よくいかにあるべきやは果してそれよくせんや。忠臣孝子がかはらまほしく孰か君父を病床に要むべく。かはらんと願ふものは誠の至りは呼ぶ。遂に感應あるべしといふとも。命数は増すべからず。汝幼弱にしてその才智。

大人ふまんとあるを既に道理をさるべき人の教言よく小耳ふとがよと説示と
と語の次ふ祖父匠作が忠死の形勢結城落城の後春王安王両公逃の蛍期の
為体を物がたり又毋と束が一子を祈る。龍の川の廟あるかくるさふ神女と
面あるふ拜ミ奉ると授けの人玉をえとで与四郎 狗の名 を招く還臣より
いく程もなく有身く。信乃が生れ一とさえよその夜ともふ説明を言葉
ふ注をくさるくいふ吉事ふ禍祥あると凶事ふ妖孽あり必ず東が
孕むを時至れば奇特ふ産まれり。さるを神女ハ辨才天社又山媛など
いふの或ハ狐狸の所為歟。そのよ社ハ神の授けのと
我も人も告ぐ愚人の多ハ惑ふ似て世の胡虚ふるうんのミ只
智あり勇ある子を孕むを祥ん産まれりとさるふ秘しく毋さえ口と禁て
けまるくさそ汝ふ告ざるとと。とふ理義をるを生まんよ。と叮嚀ふ

教諭せば信乃ハ小耳を側立て。伏て毎ふ感激しふ束ふ雲時病苦ふ
応ずく奥あるとふるひるり。當下信乃ハ必ふ母神女の授けるふ玉を
えとふそ物ふのミ携く還りまひ一百歩吾倚ふ差るるを毋ども毋れハ生平ふ
持病ヨヌくく。竟ふ危窮ふ及びまるり。さるんふ彼玉を再びさるふ索
獲ハ本復ふるるんとまあるうん。そもかくもさくその玉ふ得るりとあ
るひしふ更ふ佛神ふ祈請しく。望をさるふかるをどをこんしるもるを玉の
再び出べをよりもるく毋の病ハ日ふまくく。十日あまるふ絶る程ふるふ
限りとるひるんふ束ハ細毋ふ遺言しん。應仁二年十月下旬亨年とふ
四十三才その朝霜と共ふ倍ふ睡盛ふ如く生気絶るり。番伝ふ歎ふへさるん。
信乃ハ地ふ伏天ふあくがを紅涙袖ふ溢まるり。咽喉を轉涙び声をそそぎ
泣しふ鄰を黨集るく或ハ信乃を練め激し。或ハ番作ふ力を戮しく後の

るが相繼て次の日の黄昏に。卒に棺を擡出して。番作が母の墓の側にぞ葬りける。この日も信乃は衣裳を更ず。綿をもて面頬を包みつゝ。女の子の打扮して母の棺を送りしが。見るもの笑ひを忍びあへず。由比より還るまで指しつ密語ざるものなし。信乃はこの好景に。日来は見しかくもあれ。人の愁ひのみの一げに。これを嘲る白徒あるもとなく。どもさすも出さず。母の中陰果て後。はじめて父に云云と。送葬の日のありしを告。抑吾儕は男子なるに。なぞて女の子にせられしや。母さん吾儕がうへに厭ひて足らば。親さんに織らるゝ朽そ死るのみ。務てその故あるべきかくしまほし。ありせの人と生平ならば。怒氣に合して向ひしが。番作はうち笑ひ。その慣るゝ子あり。あるさらべ先そのよしを告らせん。汝はその兄三人あり。襁褓の中にみまかりし。かくて汝を挙し母は。この子も育ぬことに要もやまぬ。死のとき俗の慣ひに任して。

女の子にしてそだてなば恙なしと。婦人の愚癡も惑ひの。釋べき證迹を獲ざれば。これもその意に任して。則信乃と名つけしは。如此ことの義を取りしかば。婦人の忌諱を信る。僻事に似たれども。必しく許さんや。むかしも今も男児は。十五歳まで女の子に比へて。額髪を剃落さず。袂長き衣を被て。紅裏さへに許されしは。女の子に比へし證據ぞ。又櫛笄は婦女のものなれど。或は冠を串ぬるため。或は烏帽子の尻を昂くせんためにとて。男子も挿されば。尓のいと醜しとも一ぞ笑へはあらぬぞして。儻とかしとも渾沌氏を敗ひし惑ひは。あやしむ人なるまで幼稚なるぞ。汝もその年二八に至らん。當に一個の男子なるべし。是彼笑ひは知らざりしなり。彼の怒れるその智足らざるも。ち捨てお死孫といふ只一言に諭されて。信乃は忽地疑ひ解。言に就彼につけく。あれ母親の慈をかくまでにありける欤と。おもへば哀しく慕しく。泣顔拭してぞ退きぬ。

第十八回

飯川原ホ紀二郎命を隕次
村長宅ヨ與四郎疵を被る

應仁ハ二年ハ改元せらる。文明二年信乃十一歳母ヲ亡くなるとき三年以来父ヨ事てゆるく孝ヲり。さらぬぶホ番飛ハ行歩不自由ヲるものゆえ鰥夫とヲりしより年これ乳力衰へ齢五十ヨ満ぎりく歯ハ脱頭白くなるころ病煩ホ日のヨヌ為ヨ。ヲの度ホ習子ホを集合てハいと畧ーとて多本をとらせび。さる且年末衆人の扶助ヨよりて親子三人餓ど凍ぎありけるホ。ヲの子孫ホ教ビて只ヲ餘命ホ貧ホ人ヲとヲ且ヲをよりといヲ人やか且ハ郷ホ利ホ逆ーく。彼ホが恩義ホ報んホハと豫てより思ひーび病の間あヲと且折ヨ水旱ホ凶荒年の夫食。ヲびく農家日用の事をのこ述ヲるして是を一巻とて里老等ホ贈ヲ且ヲ貪と且ホ及ヲく嘆賞ー。犬塚生ハヨ述美ヲ。

武藝をよくもとヲひーホ農業蚕養のヲ人ヲでも人のヲびぎ為所ホ為ヲり。ヲの書ハ不益の賜ヲり。写ー為人く秘義せよ寔ホ可惜士を埋木ホ為ヲるとよといざ為ホハなヲる且けり。さる程ホ墓六ハ件のヲ所ホ為て妬きヲるホ及ヲをあヲび。ヲゆくヲの書ホ閲せんとヲく乞求ヲるとヲびくヲれた。里老ホハ且ホ生さび。ヲるホ某ひが写ーてをヲ且写ー果為をヲるせ為人といヲヲくホをびもヲく日を暦ーく人を遣せホ先ヲる且先へ枝貸ーてある所ヲ且ヲびとホ墓六ヲもく頂ヲて。よくヲの書ヲ及もありヲん一村の長ヲけヲり為程のホのがさびかヲとのヲ且ヲびヲんや。番飛ハヨヲヲ及ヲる且田畝の中ホ浮浪ヲ且ヲび蛭児ヨ芬る腰ぬけヲる且び紙鞘ヲヲ且ーヲヲヲく。耕畑の利をヲでぶヲヲび及傷いヲ及ヲるえと辭を極ーく誓ーび里人ホハヲの口を憎ヲく。卒ホかの書をヲ且ヲざりけり。ヲびく墓六亀篠ハ親族他人ヲ

犯を追ふて
紀三郎類助が
屋棟に挑む
玄の
犬塚番作

差別なく能を妬むの病あるを愛惜うく心僻うとふく人を嫌はども素よりこれを見識るもあるまじく人笑ひ成るもあるまじ番犬の犬與四郎ハとの年十三ヵなりしが里より稀なる老犬なれども歯並毛の澤衰へ氣力ようやく健なるまゝ一村の群犬とゝゞみる威服せらるゝ。終て頭を出すぞ墓六ことゝ成も妬くやひて年末より暫かへて幾頭となく犬を養ひ。ふみる与四郎が嚙伏らるゝ或ハ即死するもあり或ハ疵を被りて廃犬となるもあり。墓六怒ること憤ること。豫て小厮よりこゝ成るさせ与四郎を。ひとりとゝハ主後棒を内ー左右より打人とするが与四郎ハ飛鳥の如く飛退て走り過て。下ゝびも打ることなく逼て打べ郤咬著んと勢ひるれば。小厮ハ穴鞠よりあそぶて後ハ与四郎が生ー成ることを主あハつげと墓六も根労ーく遂ハ又犬を畜ひぞ見より指まゝ人よ對ひく。犬ハ門を成るとく。家毎よ養ふ物ゝるとども。今の犬ハ物ざふるゝハ主ど吠ゝく盗児ハ尾を掉て狎るもあゞ。門成る役ゝるゝ。家の四邊よ糞ちらしく。人ハ躓るのゝそゝ。さるゝ畜づるのハ猫ゝ。穀物ハ鼠を防ぐを第一とゝ猫ゝくハいふせん。よるゝくゝるゝハ犬を見せぞ。猫を養んとゝふ。逸物あゞるさせゝと。ある人毎ハ云ーゞ。ある人雑毛の肥る牡猫を墓六よ贈けるゝ。ゝゞ物とゝるゝとゝハ愛惜ふゝ性なれば。墓六ハいるゝさふるゝ。亀篠濱路ゝゝ成ゝ愛ーく。真紅の頸環うけさせく。迭代ハ膝ようち載或ハ抱き或ハ懐ゝて半晌も地よハ置ぞ墓六ハ猫の名を何とゝゞゝと決めるもつ。ゝの織人ハ問ーゝその人答ゝ。むゝ一條院のゝん猫ハ命婦のゝぞと召ゝるゝ。翁九とゝふ犬ゝ件の猫を逐ーゝ勅勘蒙ゝ。ゝるゝとあゝこの外ハ猫のゝゞ名を物ハ紀せゝ成ゝんざるゝ主の隨意名つけ

良人故事も相性もいるとうんといふまでく蟇六窮まり飛び走まで亀篠が
いろ〳〵猫は犬よりも貴ぶべきものなり昔一條院の御時まで猫が叙爵ありて
命婦のおもとと呼ばれ侍りしとぞ。余りとまく平人は主尚爵位なれば
命婦とよばれ。猫は番犬は四足白きゆゑ四白なる故に与
四郎とよぶとろいへども猫は雄子なる故に紀二郎と名づけ
めもさろ沼させく。この名呼せもの人といふ亀篠笑ひく。笑坪に入まで吁
めでた佳名ぞ濱路も如右さろ沼よ。紀二郎は何処ぞ。紀二郎ここと呼立て
あまたく寵愛さる沼よ。比は如月のさきぶ牝恋盛る友猫のよび声に浮れ
彼紀二郎は尾もあちねど屋棟より屋棟を飛ひあるくに或は群猫と挑み嘯
まく亭主が長竿に追ふさまに或は餓く常に疎き他の宿所に夜を
あく三日四日がほど家にもどらず一日件の紀二郎は番犬が背門近く壮

客糠助が厠の屋棟に友猫と挑くをまそ。その声遠く聞えく亀篠耳を
側立く忙く小厠を飛び立南向に声さるに紀二郎まあ〳〵ぞうん。
さく出て見よとて呼べ小厠にはさろ沼く。一人は出で番犬が前栽のうへに
赴き一人は糠助が宿所のうへ声をきろべ四く猫に彼紀二郎は友猫
いくく嗤ひく堪ざるに滾〻と輾びく。厠のうへに撲地と落時に番犬が
犬與四郎は匍匐伏く背門にまでまと今紀二郎が落るに乗じく身を起し走り
まて嗤仕さんと近づけば紀二郎は驚きて
傷人と前足爪冴さ物とも せざ逃ろまく。左の耳を引掛一揮ふまで
紀二郎は耳根より喉断ら且命限まと与四郎はろほ脱ぎと
驚直に追蒐さり。蟇六が小厠には三丈許あるさまとこの好景に見て。
驚き騒ぎ。吐嗟と叫びく与四郎が趾を墓〻く喘く何処までと追ば

犯ふ城埋廟のわたりふ一條の小川あり。紀二郎ハ途穴鼠アて慌
忙き引ゑ〳〵逃んとさ所ゑ与四郎ア安く跳かゝて猫の項を含咮とらえて
只一當ゑで爵殺を当下小厠ふ近つゑ〳〵彼よく〳〵と叫ぶのゝ〳〵ふ一條の棒を
含ぶ小石を把て打うけく走アて著人とさろ紙アゝく與四郎ア安くを途ゑ
横さり。打地とゑるく失ふけア。繆の騒動大ゝさるゝ孫ぶ彼糠助を背より来つ。
蟇六ハ縁由を仕くとそゞふく棒を引提。額羌とゆふ小厠の手十二ふゑろ紙
ゆく。後走ふ来つるとゞも紀二郎ハさや噬殺さる猫の仇ゑる犬ハそゞそ繆の
麹ふ尋ゆる。番作ゞ犬與四郎ゞ呼ゐゑ。と小厠ふ詳ふ告ゝゑ蟇六ハ潛然と
圓ゑる目ふ涙を流〳〵小厠ゞ救ゐざゑ紙憾ゑ且怒り且罵ゝく。棒のゝ・地
上をうち敲ゑゝるゑ彼廃人かくゝぐゝるゑを侮ゑる。彼奴ゞ妖ハゝゞ妻ゑり。
ゝゑふ嬬家を続のゝゑるゝゞ便是村長ゑ彼奴が不礼をゆゞさゝゑるゝゑゞ

養犬ゝくゝ主ゑ做ゝくゝゝゞ愛猫を殺害ゝ飽ゝくゝゑ紙辱ゝむゝ眼前ふ
犬ゑ殺ゝて紀二ゞ怒ふ雪めゞふ。この熱腸を冷ゞ。汝ふ二人ハ糠助ゑりゝとも
番作ゞ宿所ゑ赴ゑ彼畜生を牽ゞゑゑ来ゑ。その口状ハ箇様ゝと巨細ふ
説示せゞ。先ふ来ゑ。両個の小厠ハゝゝゑる果ゝく遽ゝく糠助を殺ゝ
番作ゞ所赴けゞ蟇六ハ額羌ゑ猫の亡骸をゝゑ抱せ。ゑ度ゞ得ゝと途さゞゝ。
罵止ゝゞ罷ゑゝり。今ゝこのゝゝゝふ掛ゑる橋を簸川の猫役橋とゆふゝゝ。
紀二ゞ故事ふ因ゑゝゞ。却説蟇六ゞ両個の小厠ハ糠助とゆふ犬塚ゞ宿
所ふ赴ゑ番作ゑ對面ゝく。紀二猫ゞ寂期の顛末與四郎犬ゞ残害の為
体を演説ゝ。主人蟇六この年来黙のゝ犬を畜とゆゝゝ貴所の犬ふ傷れ
戎ハ即死ゝつるゆゑゝ。ゝゝゑゝゝゞゝ蟇六ハ。ゝゑ穏便の美を存ゞて。一ト
ゝゞゞ恨ふ述ゞ。迭ふ畜犬あれゞゝゝ。ゝ争ひの端とゝゑゑゝ寔ふ能ゝゑゝと

うるうとゐひ久しく犬を畜ぢ。婦幼の愛る隨ふ。ちゝ比より猫を養しゐ。
とは又貴所の犬のゐる。一朝に失ひる。友犬の戰ふ。いづれ所ゝ定め
ぐ。猫へ犬と爭ひ。そ人とびあそとく避るめこ。ちゝ所ゐほとを追ひ。
されを殺さへ犬ゐ罪あり。件の犬をゐうとて。猫の仇を報ふべ。縛の起る
糠助男ゐ宿所のほとゐとゐてゐるゐとび燈人とくゐて来ゐとり。五倍子
犬を遮与ゐ。主人の口狀かゝのゐと。辭育しく述べ糠助へ我身ひとり。
困ド果さるおりちゐく。番作ようちゐ對ひとく村ゐへ戻るゐとと生手ゐも
人のゐへとゐぐ。怪有ゐるとゐかぐ人ひく。仏ちしく穏便の返答ゐくい
吾倍ゐほとく難義ゐ及人よろしく。元挨拶ゐのまゐ。とゐゐ番作ちち笑ひ
かぐゐとのゐゐ。ゐて和殿の難義ゐ及ぶ。元使者の口狀ゐ意ゐ得ぎいゐ。ゐ
理あるゐ仏ゐとどゐへ人倫のゐゐ。ゐく畜生八五常をちゐど。絶ゐく法度を辯

へど。弱ゐへ強ゐゐ征せゐゐ。小へ大ゐ服せゐるさとび猫へ鼠を食へど犬ゐへ
絶ゐく勝ゐゐ。犬へ猫ゐ傷ゐとゐも材狼と戰ゐとかゐゐどみゐ。見力の足
ざる所形の小大ゐよゐゐゐ。犬を猫の仇とせび猫を鼠の仇とせへゐを
仇ゐゐ死を貴ゐへ人倫のゐへゐ。畜生のゐゐ律ゐさぐゐ。報讐死刑の
制度あるゐへゐ。ちゐさゐ所ゐ且猫へ畜ゐく席上ゐあゐ。今ゐゐゐ
失ゐゐ。漫ゐ地上を奔走。犬のゐゐ命ゐ隕ゐへ。みぐゐ死地ゐへゐゐ
どゐ。又犬へ畜ゐく地上ゐあゐ。亦その所を失ひく。席上ゐ起居せび
人ゐく見を許さんゐ。ゐぐ犬足下の宅地ゐ赴ゐ座席ゐ到るとゐへ打
殺さるゐとゐ怒ゐ。猫の死を貴ゐゐ。ちゐ帰て
とゐてのゐへゐゐ。ゐく長ゐ使人ゐ使大義と鷹揚ゐ辯舌水の流るゐ如く。
理ゐ逼ゐる返答ゐ両個の小厮へ唯ゐと。猫ゐ代表ゐ被せゐ。ゐく尻を叩く。

頭を低垂れ逡巡して退けば糠助は阻ぶるを番作は辞して別れ小厮ともは退出
けるを番作は墓穴が宿所なる亀篠濱路ホ紀二郎猫が死骸を抱えて泣
叫び犬を罵る。番作は怒りて時移るまでに今のやう仇を牽めてまする欲と小
厮ゲ音つれなきを番作は両個の使ひ糠助のうたるを空しく帰るとまつ番
作が返答を。あちもうるく告しる亀篠作のく怒れる場を妨げとも妨げとも
ざる。番作が偏僻ハ今ホちづめぬとるるとも。勸解らく口をのちるづら。
嘲るを弊る非法の返答。この度ハ堪えて汝等再び彼処ホ赴き有るを
いせどその犬を荒縄うけく牽めてまよ。あるるぬるを敦圃ハ墓穴
急ホ推禁め。番作ハ足蹠を見ることを一郷乃
長とて只一頭の猫ゆゑ。この争ひを惹出し左右方傷くるあるハ理あるを
とゝとを幾度とせるを。公の沙汰ひるるを。ホ同とも聊ホ雪る

術あるなん。渠既ゆゑ彼犬のゆゑ宿所ゆ入るを打殺をとも
恨るゝと口走りせるを。謀るく犬を敷地へ繋引ひ竹槍をもて刺
留なん。食竹槍の准備をせよ。とほとろるホ説示せハ亀篠ゆうやくもひ
かくるゝ小厮ホをとゝかうるく。糠助ハ汝達と共ゆるまゝるとゝ竹槍の
るゆゑどやと問ゞ小厮ハ後方をゝ見えず。今まゞ見処ゆゝ。還るホゞ
ゝゝびゆゝとゝのゝホ亀篠眉うち顰め。彼糠助ハ番作が背門のとゝるホ
住居をゝるゝゝ固より親ゝのゝとゞ作く。ゝゞ良人の謀彼が口より洩りや
せん拔ゝるゝけゝと舌うち鳴しく後悔をゝゞ墓穴ハ公つゝく小膝を拍鳴呼
悔ゝを悔ぬ謀ハ密るるホよりとをとゝのゝホゝゝゝ奴ゆゆゝをゝ遠くゝ
ゞゝゞ追留よ童ハ足いと早ゝのゝ額義ゆゝ孩といそゞせハ急もあゝゞ外面へ
嘗ゝホ褰く走去るゝ。尓るホこの額義ハ年ホ似ゞるく才長て。その才をあゝん

さぞ志気あるものならバ月ごろ主の於姉が傍らにてものかは陽にハその意を慊らず。この日も件の計較をいと嗚呼なりと思ひにハ思はざるにあらねども。いふるまゝに遽しく走り出しが遠くハゆかず且しばしかくて見つゝ途より追ひきさゆりしかバ彼宿所まで追ひ来て見しに糠助が家へも宿へも還らず彼人ハ去年の秋の貢の債あまりたるに村長を欺きて自滅を招きしが見捨おきなれども口利なれバゆかじと思ひつゝ先まづ彼処へ索ゆかんとするほどに索ぬべうもあらなや。と真しやかにちからなきに蟇六が聞くうち点頭ていはく現汝がいはずとも渠ハ債あるものなれバその身を愛せバこそ逐電したるならめ。よしやいかにとも浅まじくも彼犬にハ四足あり主の番もしつべうもあらねど霎時ハとられず撃てありとも日を歴るべし出るかぎりその足を敷地へ呼びよせて刺殺さんこと易かるべし。竹槍の準備をせることその手配を傭人させ與四郎犬がいでまゐらばより

日なく俟るべし。却説莊客糠助ハ蟇六が計校を番作にもらせんとおもへバ別を告ずして遽しく走り出犬塚が宿所へいそぎしが。蟇六夫婦がいひつることを潜かに報知せばやと思ひしが。中言するに似たれども某村長にハ債あり彼人のうらみを受けなバよしなく告るにあらず。幾義絶の親類とはいへ長の内室ハおん身の姉なり。畜生のうへによりてなまじひに怨を結んも好からず。絶ていはじとかうべ彼與四郎が近郷へ遣しかバ犬どもにまゝ来るとまゝに思ひたる人の怨も自然と解るのと。この儀ハいふにも密語べき番作のもとへ吟じ。今よりさめの和睦が親切戚びあるべきにもあらず。然るぶん蟇六園宅の智嚢を捕て隙めづらことともこれ露ばかりもさとるを恐れど。せんすべハ又からしきをあるべし。口ハ根らくハこらぬ足塵て。近来ますく、ヨヌ病え理ありといふとも争ひ好ますぞ。且畜生ハ智あらで智るし。安危をしらざるものなれバ欺きて彼処にもあらん。

打殺さんとすれば、こぶ羞ぢて和殿よろしく計ひて犬を遠離ざるべし。と言へども、
諾ひ、糠助犬を欺びく。信乃ゆも縁由を告、與四郎と物語食して、その
夜瀧の川へ牽ゆて、彼処の寺へ関つる犬、糠助よりと先よりかるまて。
たや、番犬ぐ門ををとこ、途の近所故なり。河水渉さべるるとそ次の
日まで東南のうへ牽出し。宮戸川をうちこと牛嶋ゆ乗ゑ所と其処ゆも
をでかへるまつかくの如くさること両三度五六日を費せども。労してその功
なるとへ、糠助ハ呆れ果て。遂ゆ又彼犬を乗ぢ。當下信乃ゆ与
四郎ハ主を慕ふく外ゆ禍の及ぶ所なるべ。この犬果して殺さんとすれば父の
怒り甚しく。いとなるるのやうで来るべ。彼ハ与四
郎も殺さんとてこぶ伯母夫婦の恨も散て。云異ゆ為さるる謀なるべきや。
とものびくゆ姉肝を摧ぢ。僅ゆ一の計を生し。父ゆ告ていはく成ら。

糠助男ゆ相潭ぢ。とゆくべ外ゆ出て。件のことを所事ゆ畑を伐て
草野ゆ走り。側ゆ耕すものるるべ。折てそのけ。と彼処ゆ赴き云云ゆ世ぞ
やとゆふ意中の機密を説示し。所詮彼与四郎を伯母夫の宅地近く牽
めて。犬ゆ對て罵ていはく。この畜生よりをるく長ぐ愛する猫を殺して。
親族怒を重るの禍を惹出せるとよりて志びく乗さんとするはこりざもゆ
えりまて。みづから死地ゆ入る所ぞ。今ハ、せんすべ汝を殺して
こぶ伯母夫婦の怒所解人とゆふのを見せよと罵て。杖をあげて
犬を打べ犬ハ必逃走ん。逃る所追ふて打走し趾を慕て宿所ゆ入て
且く犬を繋ぢ置ハこぶ伯母夫婦。その声を聞。その好景所ていく少ちのうん
番伴その子ゆ犬を打て。猫を殺せる罪所謝せて。と了解せば怒も散て
犬を殺すの念所絶て。与四郎ぐ必死を救ぐ。こぶ父ゆ恥あるとて。親

簇葬が重るの歎きあり。このわ何ともいはまくと同く糠助一縊に及ばざど叶
賢哉こゝ和子は僅に十一才。その智はむかしの楠公に劣らず。且その謀る所親
の為伯母を欺きの孝ん義え。これも共侶にゆくべきにあらずといそがせぬ。
信乃は既に翼をぬくごとく。さらに仇まなく勇をあらし遠しく走り去りくつを
門にある與四郎が鎖引立て糠助の背共墓六が門に折くむかひて遽て追ひ
ぞく声をかけて立。云云と罵責て。棒を揚杖を採て。與四郎を礑と打
なりて犬はよろぼふたど。生平ならばあらで糠助さへこれが打て大く
ちかふ後が驚き瞬て途が失ひ舊の路へ逃をえうず。墓六が宅地を
遶るさく。背門のうちぞ走りける。信乃糠助はこれが為にてある便逭そるふ
あらざれば逃よといへぬだろふ途が知らざて左右に引まひ杖が
揚て追蒐るに犬はいよく狼狽さまだて。走て脱んとしつまたとの処を
瓢のごとく口一方にして。前面は路なし。已ことを得ざれど墓六が背門より裡面へ
走入るのみ。勢に乗りて。左辺なる子舎へ身を跳して飛込けり。さればやと騒ぐ
墓六が小廝亦は手配して。後門を蔀門も礑と閉。是首より彼首より散動
声。罵しればかくぞ。聞えしかば糠助は慌惑て。信乃が袂を引とゞ免。毛氈
吹疵を求むるより。虚ことなしとそゞろに忽地不虞の危殃あらんとて逃
あへといひもあへず。拿たる棒を隠さんとて。懐へ挿入まろ。走り避んと
せる程に腮につき。脚にかゝまり罣九さへ推痛めて。俯に跌倒れ吐
嗟と叫て。棒を繰り捨をそ。やくに身を起せば膝破れ衄血流るゝ。あんくえ
るに遑あらず。面を皺め。膝を拊。足が引々逃亡なりかくても信乃は退すぞ。
よしなき所行をしつるよと。百遍悔千遍悔ども又せんすべはなかりけり。
なき隙もあらず。與四郎が赦ひとらんと思ひしも。彼此に立遠ざかりて犬の

犬塚信乃戌孝
蟇六小
文の太郎ふ

犬飼現八信道
庄官ひ兵

出かねて待とはいへども門の扇を鎖されたれば。絶て出べき路もなし。犬はいと苦しげに吠噬く声聞えにければ。嗚呼与四郎は殺されたるならんと思ひしかば。走て出んとすれどもかなはず。杖に携るほども背門のほとりにたちて。かくあるべきにあらざれば今は救ふによしなしと思ひ。絶て宿所に還り。已にて得ぞ云云と遂におよび。又番作に告しかば。番作怒れる気色なく。つくと嘆息し。汝総角よりといへども。人にまさる才学あり。その智よなくて不覚なりとやせしは人をしらざるの失也。これが蟇六は能を娟む小人なり。汝僕して犬を打とも。渠豈それを嗛りて。憤を解めのなからんや。しかれども当座より犬を追入れて。撃せしは不覚に似て不覚にあらず。彼より犬を喚かへされて殺されるべからざるなり。これは悔しく思ふなれども与四郎が死は不便なれども。惜て今さら詮なき事なり。その伝風声を聴定めんよ。

といふ言葉いまだ終らざる件の犬は血に塗れ起つ転つ庭門より踉くと走り入て来つ。そのまゝ撲地と臥しかば信乃は走ても見んとて。ある痛はし与四郎が還りきたりといひあへず走りよりて。勤れば番作は遠しく柱に携りて身を起し。縁頬に出てつくと見て紛創痍を受たるか。其処にて繋れて還りしは老ても逸物なるかな。雖然生がたし。日蔭へ牽入れさせよといふに信乃は走りて縁頬の下に藁薦布て。痍負る犬を扶臥させ阿与四郎よ苦しき歟。汝に危殆あらせじとてこそ如此まで繋しかど。汝は脱路をその失ひ怒る人の背門より入てかくは命を隕しめたれ。それは吾僑の越ることなり。よるなき君と身を責て。水を口に沃ぎ入れ薬を痍に揮りけり。ひたすらに唱へて勤れども又生べくもあらざりけり。かくて程なく蟇六は憎しと思ふ与四郎がちからに背門より走り入て子舎へ登しかば。やがて小厮に門戸を鎖せ主従をとく

五六人准備の竹鎗挾〻追ひ出し。駈立て刺留んとすれども件の犬は足を早て。鎗下を潜り脱路を求めて出んとすれども前後の門戸殆さ閉べ。進退既に窮て。

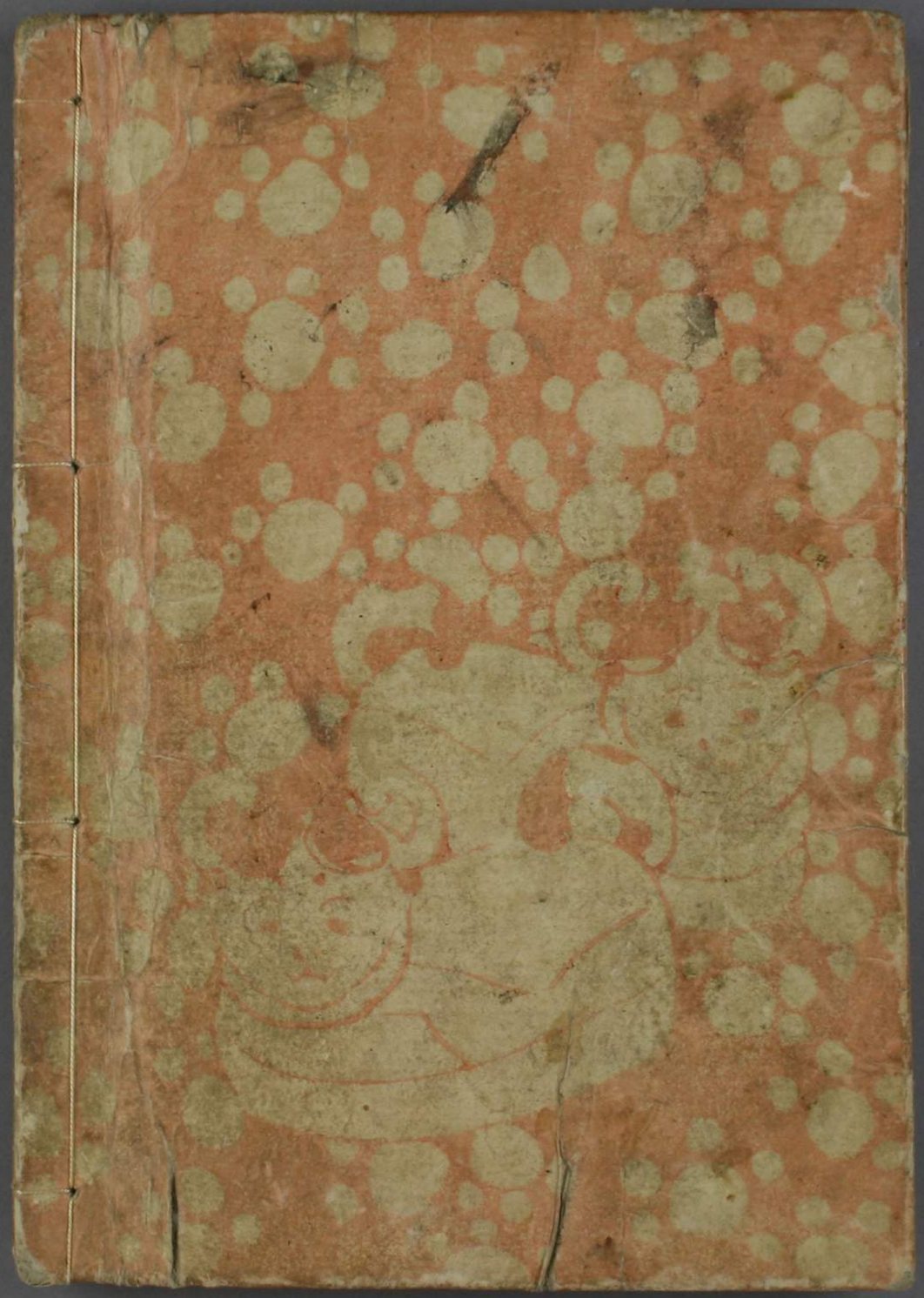
[illegible]。数个所の疵を受て。吼て狂ひて伏も斃れず。板屏の下突破て。外面へ出しが。彼逃さじと。蟇六主従門扉を開て追蒐しが。さのみ遠くは引退き。蟇六意氣揚〻と小厮ホを労ひて。けんの働を拔群んと。恨くは犬を刺留ざりしを深疵を負せしが。必途遠く斃るべきかと。

と。[illegible]貌を。鎗を庭に立て。縁頰ホ尻をかゝ[illegible]亀篠は背より翁と[illegible]。

あらぬ立ぬけんとい[illegible]紀二郎が。雖言を[illegible]やく復し[illegible]。[illegible]と彼畜生は猛くとも死ざる。汝達は怪我せずや。と問へ小厮ホ祖を收いる何とも。つまづきぞ宜ん如く猛犬まく。吾们が[illegible]及ざる主の光りで。[illegible]。[illegible]。痛痍を負しゆとい[illegible]ホ蟇六さもこそと。鬼高ホをとめ[illegible]躰〻

裡面ホぞ入ホる。そが中ホ額蕊の[illegible]小厮ホと共侶ホ立さるぐの[illegible]犬を追ひ。畜生に傷けしとく。妻子に[illegible]る主の白ホ[illegible]。且〻く蟇六は亀篠を一室ホ招て蒸禍引立させく。額ホ合し声を潜め。今小厮ホがらの犬ホ番伴が犬が出るく。背門より走て入りつるを。信乃が追入をこれ[illegible]。その[illegible]件の小孩児が犬を責て云〻と罵る。[illegible]のあり。その信乃一人が所為ぞ。糠助も共侶に彼犬を打しとい[illegible]。その故なくはあるべ[illegible]今その[illegible]猜[illegible]ホ番伴陽ホ剛[illegible]ホ示せど。みづから爭ひ[illegible]。さてその子に分付て。犬をとらへ[illegible]。[illegible]との勢ひを脱ぎして。[illegible]。番伴に帰伏させ。彼村雨の一刀も。遂に[illegible]ホ入るとあれど。[illegible]と大塚の遺蹟[illegible]。家[illegible]。舊紀もあり。匠[illegible]の長女さる。その夫とい[illegible]の[illegible]ホ鎌倉ホ成氏

朝臣は顕定定正の両管領と中わろく成りしかば屢鎌倉を追落
され許我の城に籠せられて合戦今に絶る隙なしと聞えしかば當所の
陣代大石氏も早晩に鎌倉へ出仕なして両管領に従ひたり。これ兄成氏乃
おん兄春王安王の傳なりし。大塚氏の後なれば両管領へ大かたならぬ志あれ
ばかれさまざまの始終の安危心のとるなし。彼村雨の一刀を鎌倉へ献らばこそ野
心なきよしを志らせなるのくちはぎ恩賞抜群なるべしと思ひに定むれどもかの
年来心を竭し術をかへ件の刀を謀れども番作もその機を志りてや絶てこぶ
家にあらはさず宝刀をふかく蔵おきて人にはなしとも見えざれば いかにともせんすべ
なく今に宿望を遂ざ給とひ恰とひ番作を京に帰降させ件
の宝刀を獲らんとすれ家の繁昌疑ひなし。然とても番作はさらさら智
勇に長たるものなれば。糠助を使ふにあらざれば輙くは謀りがたし。小

孩児と共侶に犬をまうちて追入れしは究竟のよぞかし。かれ犬窮に糠助が
召よせてくはしう箇様々にいひくるめば番作智勇ありとはいふとも進退其処に
窮らばいかでか子の為に迷ざるべき。縛十分に成就せん。その謀は如此こと
耳に引よせてくはしう密語は亀篠只管感嘆しうち笑るがら頭を擡との謀
奇なる妙なり。番作は手ありとも彼が母はこちが母なりぞ志さんならず
とも百歩の間にをるからがら絶て一下とび訪も来ず姉を識臣罰なかれて。
おのれはせんへとのとみなりさんとて小廝をはしよせて糠助召よせく遣し
けふ畢竟亀篠糠助にいはるる此鋭出せる。そは又次の巻にて解なん。

里見八犬傳第二輯巻之四 終